早稲田大学博士論文（概要）

2004	学位記	文科省報告
	3841	甲 ㊁ 1898

博士（人間科学）学位論文　概要書

他界の民族学的考察

——*Feuermann* 伝承からみる西欧の死生観——

An Ethnological Study of Revenants
Feuermann and Afterlife's Discourse in Europe

2004 年 7 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

嶋内　博愛
Shimauchi, Hiroe

ドイツ・ルール地方で 20 世紀初頭に編まれた伝承集に、以下のような話が収録されている。

ローンの司祭が、エアベリッヒのある病人の（告解の）ために呼ばれた。司祭を呼んだのは病人の２人の隣人たちで、彼ら２人と教会の寺男が随行した。一行が今日キュスター十字の立つところまでやってきたとき、いきなり寺男が叫んだ。「司祭さま、燃える人が来る！」「祈り続けるのだ。そして進もう！」司祭は答えた。燃える男が近づいてくると、司祭は祝福を与えた。すると、男が話し始めた。「この祝福を、ずっと長いこと待たなければならなかったんだ。まだ生きている頃、祝祭日に礼拝するのを怠けていたんだ。これで昇天できる。ありがとう」。そう言って、霊は消えた。

[Hoffmann, Heinrich: Zur Volkskunde des Jüricher Landes. 2.Teil: Sagen aus dem Indegebiet, Eschweiler, 1914, S.22, Nr.64.]

（訳文は筆者によるもの。また、丸括弧内は筆者による補足）

夜道を歩く一行の前に突如として現れた「燃える男」。その正体は、まぎれもなく死者、より正鵠を期して言えば幽霊である。生前犯した罪ゆえに昇天を許されず、現世を彷徨っていたところ、通りかかった司祭の祝福を受け、ようやく彼にも救済の時が訪れた。

ドイツ語圏の各地では、19 世紀から 20 世紀前半にかけて、さまざまなザーゲ（いいつたえ）を収集および編集・出版するという営みが盛んに行われた。その結果、じつに膨大な数の伝承集が編まれており、上に引いた話も、そうしたもののひとつである。文字化されたザーゲのなかから、とくにデモンに関する類話を中心に整理・カタログ化した資料室「Deutsche Sagenarchiv（ドイツ語ザーゲ資料館）」が、ドイツ南西部のフライブルク市にある。本論では、そのカタログ番号 164 番に納められている、「Feuermann（燃える人）」をモティーフとする類話約 340 編を基礎的なデータとして使用し、これらを重層的に検討しつつ、そこから垣間見える「死後の世界」について考察する。

じつは Feuermänner に関するザーゲは、旧来のドイツ民俗学では分析対象としてはほとんど注目されてこなかった。というのも、このモティーフが「死後の徘徊と救済」という、宗教とたいへん深く関連するテーマを中心にもつためで、「キリスト教以前からある、ゲルマン的な要素の残滓」探しを主眼とすることが多かったドイツ民俗学からは、いわば見捨てられたモティーフだったといえる。今回あえてこうしたモティーフを選んだのは、筆者が、オリジンよりもむしろ変容に興味を持っていることが大きい。

本論文は、以下のような構成をとっている。

第１章では、ドイツ民俗学における伝承研究史を通覧し、また、Deutsche Sagenarchiv

についても紹介する。

第２章では、自然界で発生する怪火現象をどのように命名しているかについて、その語源をみる。

第３章および第４章では、Feuermann に関する伝承を読み込み、個々の伝承素だけではなく、話のオチにどのような型があるのか、また、地理的分布などについても考察する。さらには、モティーフ成立の裏にキリスト教の世界観が不可欠だったことを導き出す。

第５章から第７章までは、キリスト教を布教する側が、いったいどのようなロジックを持っていたのかを、歴史と照らし合わせながら検討する。

そして第８章では、Feuermann に関するモティーフとキリスト教サイドのロジックをすりあわせ、キリスト教世界で受け継がれてきた他界をめぐる伝承について、筆者なりの見解を提示する。

他界にまつわる伝承がキリスト教世界において果たした役割とは、いったい何なのか。まず指摘できるのは、これによって生者の世界に死者の居場所が確保された点だろう。伝承がもつ寓意性・説話性を通して、死してなお、人はキリスト教の枠内に留まることが許されるようになったのである。

もうひとつは、伝承の持つ社会的・歴史的・文化的役割、すなわち＜キリスト教が生者をして死者を語らしめている＞というトリアードの存在だ。伝承を語る主体（民衆＝話者）と語らせる主体（教会＝作者、訳者）、そして語られる主体（死者＝登場人物）。これら三者が紡ぎ上げるメカニズムこそが、伝承を伝承たらしめるのであり、民衆世界において教会が支配的な役割を担うための大きな戦略として、Feuermann 伝承は利用され、機能していったのではないだろうか。だとすれば、Feuermann 伝承は、キリスト教世界と民衆世界の界面であり、そこには民衆と教会のイマジネールがふたつながらに織り込まれているともいえる。これが、筆者なりの結論である。